

浄

monthly
JŌDO

土

July-August 2006

7・8

合併号



法然上人鑽仰会



聖道門は深しといえども

時すぎぬれば今の機にかなはず

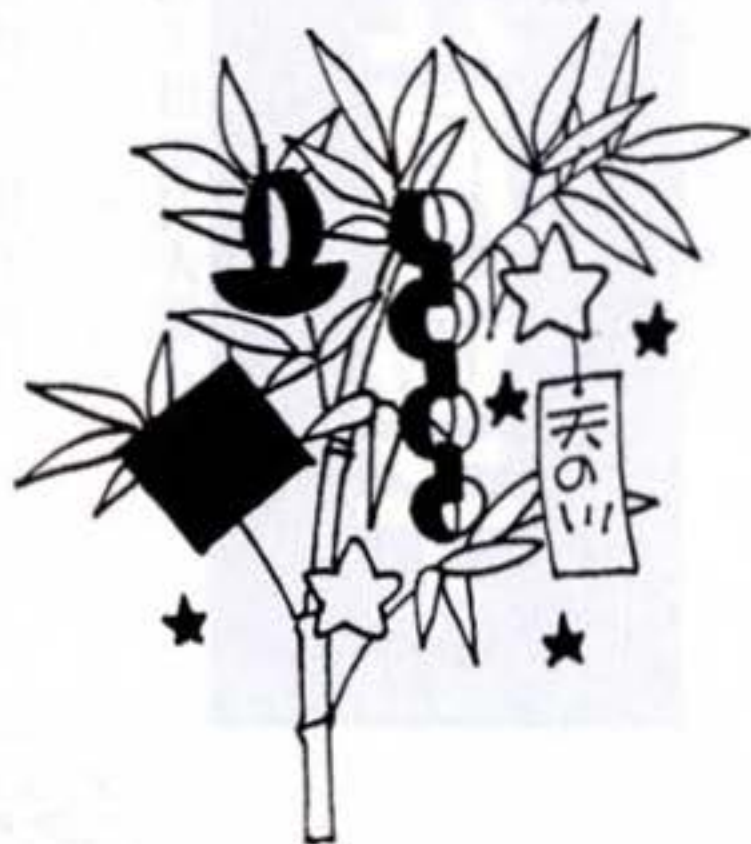
浄土門は浅きに似たれども

当根にかなひやすし

浄土

2006/7・8月号 目 次

「お盆」に憶ういろいろ	江原通子	2
会いたい人 五十嵐喜芳さん①	関 容子	10
出雲紀行(最終回)	森 清鑑	18
響流十方	袖山榮輝	26
シネマ随想	袖山榮眞	30
仏教コラム	大室了皓	35
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆猯下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

お盆
に憶う
いろいろ

江原通子



今年もやがてお盆になりますが、明治五年の改暦によつて、現行の太陽暦の日付と天体の運行は一致しなくなりましたから、お盆の行事も、天体に合せる人、現行の西洋暦に合せる人、便宜的に一と月おくれをえらぶ人、そして今は企業の都合に合わせてお盆をする人と、実に区々まちまちです。

しかしそれ程遠くない昔、つまり六十年ばかり前の、敗戦前の農村を思うと——懐かしい父の田舎のことを思い出してみても、村の暮らしの中で、お盆は必ず八月に來ました。何故と言つて、八月にならねば、天地自然はお盆の姿にならないからです。お盆が來ると、それまで励んだ野良の仕事の何も彼も、何故かぱたりと片がついて、見渡す田畑に人影もなく、玉蜀黍とうもろこしがさやさやと葉摺れの音を聞かす夕暮れ、その葉陰から、ぐい、ぐい、ぐいと音も無く昇るお盆のようなまん丸の満月——それはまさしく旧暦（太陰暦）七月十五日の宵の風景なのでした。

七夕たなばたもすぎた田面たのめに初秋の風がさやかに吹き抜け、人々は天与の休日を楽しみ、天与の収穫（初成りの野菜や果物）を味わつて一年の労苦をつぐなわれ、心も体も満ち足りて、亡き父母や、先立つて行つた親族達に、追慕の供えを手向けるのです。

こうした風習は遠い昔、おそらく仏教伝來の七世紀よりずっと以前から、日本の国土に行われて居たのでしようが、中国に漢文の『孟蘭盆經』うらんぼんきやうが行われ、それが日本にも伝わつて、祖先崇拜の心の強い日本人に忽ち容れられ、斉明天皇三年（西暦六五七）には、すでに「孟蘭盆講」が行われたといひます。

よく云われるように、孟蘭盆の語源は梵語の ullambana から來て居り、倒懸（逆さ吊り）

の苦を救うの意があると云われますが、更にそれは遠く西方イラン辺りの「靈魂」を意味するErvanから来て居るといふのが戦後の定説になりつつあります（異説もあるといふことですが）。とにかくこのお経は、ほとんどのお経がそうであるように、インドで成立し、中国で漢訳されたものではなくて、はじめから漢文で書かれた偽経ではないかと疑う人も多く、事実サンスクリット（梵語）や、その類縁の言葉で書かれた原典は、今までのところ、どこからも見つかつて居ないようです。

それはともかくとして、一度この経が古来不要の先祖の魂祭りに仏教的裏づけを果たして以来、千年余を経る年月の間、私達日本人はこれを民俗行事として守りつづけ、発展させて来ました。

私は現在、東京二十三区の中の、旧都心に住んで居りますが、そこでもまだ居つきの方^{かた}方は家の近くに菩提寺を持ち、新のお盆の十三日の夕方には、浴衣に着かえた子供達が、祖母の手をひいたりしながら、明りをともした小さな提灯を手に、菩提寺のお墓に御先祖様の魂迎えに行つて居ました。町の通りは何となく活気づき、夕燕が低く軒をかすめて飛んだりして居ました。つい、二、三十年ほど前の光景です。

こうして見ると、私達日本人は、どうもお盆とは御先祖のお墓詣りをする日、家にご先祖をお迎えして、おもてなしする日と思ひこんで永年暮らし、更には「お盆とは、菩提寺に何がしかのご供養をお納めする日」などと思ひこんで暮らして来たようですが、一方お寺様の方でも、

「御苦労さま。お盆って何だか知ってますか。お盆には、本当は何をするのか分かつて

ますか」

と、声をかけて下さる和尚様方は少いのでは——もしかしたら絶無に近いのではないかと、少し心配になって来ます。

お盆のお寺様はお正月まで一緒に来たほど忙しいのですが、出来れば雑務の処理は有志に任せ（それがその方々にとってのこよない功德になりますから）、僅かな時間でも割いてお詣りの方々にかたがた

「お釈迦さまには沢山のお弟子があつた中で、舍利弗尊者シャリホフと並んで双壁と云われた目連尊者は、特に神通力に秀で、或る時その通力で亡くなったお母さんが今どうしておいかと見通すと、何とお母さんはこの世に居た時、我が子可愛いやと、目連様への慾にひかれ、その為死して餓鬼道に落ちて苦しんで居られました。これを悲しんだ目連さまは、どうかしてお母さんを助けたいと、お釈迦さまにお指図を仰ぐと、お釈迦さまは、雨安うあん居こが終わる衆僧自恣しゅうそうじの日、心から食事を供養し、その功德を母にめぐらしなさいと教えられ、それに従って目出度くお母さんをお救い出来たというお経の伝えにもとづいて、私達は今でもお盆には身をつつしみ、真心で人さまに尽し、互に慈しみを交し合うのが、本当のお盆です」

などと、やさしく教えて下さる和尚さまがおいでなら、そんなお寺に私も行きたい……。

私は数えの四才の時、関東大震災でその日のうちに焼け出され、当時まだ郡部の杉並村と呼ばれて居た今の杉並区に棲みつきしました。まわりは一面の桑畑、その向うは薄原うすはら、その向うに富士山がいつもくつきり見えて居ました。当時大ていの家は番犬を飼って居まし

たが、私の家では「チャリ」と云う名の黒い老犬が姉の仲好しのお宅に飼われて居て、どうしたとか毎日広い原っぱを越えて私の家に遊びに来、そのうち段々居ついて、飼主さんから「上げます」と言つて、いただく結果となり、彼は近所の犬たちをよく統率して居た一種の人格者(?)でした。彼のもとには沢山の犬たちが遊びに来ましたが、当時はまだ放し飼いの時代で、飼主があれば首輪をつけ、首輪がなければ「野良」とわかつて、自分の飼犬の餌皿に少し余分に入れた余り物を、野良が食べて居ても見て見ぬ振りをし、飼犬も見て見ぬ振りをして犬小屋に寝そべって居たような、呑気な時代でした。

或る年の夏のはじめ、それはお盆の迎え火を焚く日でしたが、「チャリ」の所によく遊びに来る首輪なしの犬が私達の目の前で捕獲されてしまいました。江戸ッ子の祖母は怒りました。

「いやだねえ。地獄の釜の蓋もあく今日はお盆の十三日だよ」

祖母はすぐに長火鉢の底の抽出しをさぐつて、若干のお金を若いおてつだいさんに握らせ、彼の後を追わせました。彼はすぐに犬を渡してくれました。首輪なしのその犬は賢く万事を了解して「チャリ」の子分として私の家に棲みつき、首輪も買って貰つて「クマ」と呼ばれ、終生「チャリ」につき添つて暮らしました。

このことは幼い私に或る感銘を与え、今尚与えつづけて居ます。一文不知の祖母のしてみせてくれたことは、万巻の『孟蘭盆経』に価したと、感謝せずには居られません。尚、余談ながら、その時祖母から預つたお金を握りしめ、犬をとりもどした若いおてつだいさんは、その後幸せな人生を送り、現在、九十八歳の長寿を保つて尚すこやかに暮らして居ます。彼女の家と私の家は、互に親子四代をこえる交流が今も続いて居るのは有難

いことです。

さて、ここで筆を転じて先ほど触れた「自恣^{じし}」という言葉について少し申しませう。私達日本人に余り馴染みのない言葉ですが実は深い意味を持っております。

日本と違ってインドでは、乾季と雨季がはっきり別れて居て、雨季の三ヶ月、修行僧たちは行脚を謹しみ、縁に応じてえらんだ一ヶ所に定住して修行に専念するのが習わしでした。そしてその結集^{けっじゅう}が了る最後の日に、全員が集って一大反省会が持たれ、各人は銘々自分の行為についての反省告白を衆僧の前で行い、至らぬ所を心から謝罪し合いました。それは他からの指摘譴責ではなしに、すべて自己内部から湧き興る反省（自恣）にもとづくものでした。発言はすべて自己責任でした。そしてそこで、互に限りなく清められて行きました。

修行者全員が自^{みづか}からを最も清めたその時点で、最も清らかな心で食事を差し上げる——その最も清らかな供養の徳をふり向けて、母を救いなさいという釈尊のおさとしでした。

捧げる心も 清浄

受ける心も 清浄

捧げる物も 清浄

私たちのお盆のご供養も、このような「三輪清浄^{さんりんしょうじよう}」の世界であれかしと願わずには居られません。

最後に一つつけ加えさせていたゞくならば、私達日本の仏教徒はよく「喜捨」ということを申します。

「今日、お盆でお寺さまに行ったら、この間の颶風で御本堂の庇が傷んで修繕なさるらしいので、少ないけれど、持ち合せを喜捨して来たの」

などという具合に――でも、もしかしたら、「喜捨」とは、後代、便利のために使い慣れて来てしまった言葉なのではないでしょうか。誰も「喜捨」の原語を正確には知りませんし、私も知りません。

勿論、釈尊の教えの中でも重要なものとして尊ばれる「四無量心」の、

慈・悲・喜・捨

と言う項目は、ひろく知られて居ます。はじめの二語は「慈悲」と、しばしば連動して使われますが、それでは「喜捨」とつづけてよいかと言えば、これは全くもとの意味とちがった使われ方が、日本でひろまったと思われまゝ。釈尊の説かれた「喜」は人の幸せを共に悦ぶ、人が佛教徒として正しく生きて居ることを見て、自分のことのように喜ぶ、そんな心境を指しますし、「捨」の原語は *upekṣā* (梵ウペークシャー) で、一切のものに執着を捨てる、非常に高度な無関心を指し、「七覚支」(悟りに至る七つの道程)の最後は、この「捨」で、一気に悟りにかけのほるのだと言われます。

これほど重要な言葉なのに、これが中国から日本に入る時、ウペークシャーは捨てるの「捨」だ。前とつづけて惜しまず捨てるで「喜捨」というのもいい言葉だなどと、誰か面倒くさがり屋が使いはじめたのかも知れませんが。

正しく辿れば悟りの根源に達する程の大切な言葉の「捨」については、私は未熟でここまでしか書けません。が、ともかく仏教はちよつとした言葉の詮索だけでも、このように新しいものや、古いものや、知らなかったことや、為になることが、ざくざく出て来る世界です。今年も亦来るお盆を機に、仏教のより真実の姿に一足でも近づいて行きたいものだと思います。

筆を擱く^おに当たり、又、いろいろなことを思い出しました。一つは、「捨」について、シャンソンをうたつて下さったお坊さまがありました

ケ、セ、ラ、セ、ラ、

なるようになるわ

あとのことなど かまわない

ケ、セ、ラ、セ、ラ——と。

もう一つは、三十数年前に御遷化なられた鎌倉円覚寺の、朝比奈宗源老師の或る年のお盆の法話。

「目連さんのお母さんも、そう大して世間とちがった人だったとは思わない。今でも、今日はうちの坊やの仲好しが来るから、カレーでもつくりましたようと、いそいそつくるのだが、いざ盛りつける時に、つい、ちよつと大きめの肉の切り身を我が子のお皿につけてしまつたり、うちの子と隣りの子と二人で〇〇中学の補欠をうけるが、定員は一人。隣りの子が落ちて、うちの子が入るといいがなんて、今の世の慈母たち、みんなやつとる——アツ、ハツ、ハ——」

（えはらゆきこ・随筆家）

連 載

会いたい人 関 容子

五十嵐豊芳さん
①



撮影／タカオカ邦彦

ほどよい甘さと哀愁の漂う声で切々と歌い上げ、聴く者の心に直接訴えかけてくるテノールの声。少女のころ、私がその魅力に初めて出遭ったのは、戦後間もないところにイタリアから来日したフェルツチョ・タリアビーニのコンサートだった。大学生の兄に連れられて行った神田の共立講堂で、とりわけドニゼッティの『愛の妙薬』のアリア「人知れぬ涙」には心を奪われた。

それからは兄にねだって当時帝国劇場でよく公演のあったオペラ『椿姫』や『カルメン』を観に行ったが、藤原義江など日本人のテノールの声はなぜか心に響かなかった。

十年ほど経って、あるときテレビから流れ出た美しいテノールの声に心を捉えられ、タリアビーニの記憶が突然よみがえる。あの甘さ、あの哀愁。曲目は「忘れな草」。それが五十嵐喜芳さんの声を聴いて感銘を受けた最初だった。

「ああ、あの番組、憶えてますよ。昭和三十

年代で、テレビはまだモノクロの時代だった。レコードのナガオカカのレコード針提供で、ぼくがピアノの前で弾き語りをしたりする。イタリアから帰国したばかりのころで、毎週レギュラーで出てましたね」

それからの私は、五十嵐喜芳出演のオペラを見つけては、『カルメン』『マノン』『トスカ』『リゴレット』『椿姫』『愛の妙薬』……と追っかけをした。

こんなきれいなベルカント唱法とイタリアの雰囲気をも身につけた日本オペラ歌手が、どのような生活ででき上ったのか、とても興味深い。

五十嵐さんは昭和三年九月、六人兄弟の次男として神戸に生まれた。父親は自営の海運業だったので、ポンポン蒸気に乗せてもらってはよく海に出ていたので、それ以来海が好きになったという。

「父の名は保喜で、兄は保、ぼくは喜の字を



大好きだった兄や姉との思い出の写真



もらって喜芳。十二歳上の姉が夏子。親父はちよつとひねった名前のつけ方をしましたね。この姉が音楽好きで、うちにピアノがあったし、ぼくにピアノを教えてくれたし、クラシックのレコードをしじゅうかけてました。あとで武蔵野音楽学校に入ったんですが、その姉が『オーケストラの少女』という映画

に連れてつてくれて、ディアナ・ダーヴィンの歌う『ハレルヤ』を聴いて、歌の面白さにぼくは魅了されたんです。神戸で藤原義江のコンサートがあったときも姉と行ったんですが、藤原先生はまだ五十歳前だったはずなのに、声がオウオウと揺れ動く。どうしてもこんな声なんだろう、とそのとき小学生のくせに思いましたね。あとで思えば、何でもかまわずいろんなレパートリーを歌い過ぎたせいでしょうね。歌い手は自分に合った声以外の歌は決して歌っちゃいけないんです。たとえばぼくはリリコ・レッジュロー（叙情的で軽妙な声）ですから、『愛の妙薬』とか『真珠取り』とか『ウエルテル』とかは声に合っているんですが、『トス力』とか『カルメン』の三、四幕のようなドラマティコ（劇的な声）のレパートリーを無理して歌い続けると、声をダメにしてしまうんです。と言っても、相当ぼくもいろいろ歌わされましたけどね」

五十嵐さんの母親は声の美しい人で、台所

に立ちながらよく歌っていたそうだ。

「そう、『浜辺の唄』とかね、声は小さかったけどきれいな声でした。父は完全に音痴です（笑）。これが遺伝していたら、今日のぼくはないですね。姉は三人いて、音楽好きの上の姉は学校の先生になったし、二十歳のときに肺病で亡くなった姉とか、嫁に行った姉とかがいました。兄は若くして戦死しましたし、可哀そうなのはぼくと一つ違いの妹です。妹が五つのときにぼくと二人がジフテリアにかかって、往診に来た先生が妹にまず注射を打ったら、分量が多すぎたのか、途端に亡くなってしまった。父がものすごく怒って、訴える、と言ってましたけど、あれがもしぼくが先だったら、ぼくは死んでいたわけです」

もうこのあたりから五十嵐さんの運の強さがわかる。

その後、歌の上手な喜芳少年は近所中のアイドルになり、みんなの前で歌わされた。

「当時のことだから軍歌ですよ。小学校の

先生から、お前はボーイソプラノだ、って言われました。六年生のときに歌のコンクールに出るように言われて、『紀元は二千六百年』というのを歌ったんですけど、ぼくは成長が早くてもう声変りが始まってましたから、終りのほうのへああ一億のお……という高音の声が続いて、十位（笑）。入賞は果せず残念でした」

背の高い人は声帯も長く伸びて、たいていバスやバリトンになるそうだが、五十嵐さんはテノールの短い声帯に恵まれた。これも幸運。だって、オペラの二枚目の主役はほとんどテノールだから。

昭和二十年、大阪音楽学校に入学。

「その年の暮れ、親父が脳出血で倒れて、翌年一月に亡くなるんですが、病人に、酒が飲みたい、と言われて困り果てましたね。どこにも酒なんて売ってない。すぐ近所には灘の生一本の醸造元が空襲で焼けて、大きな酒樽が半焼けになって残ってましたけど、臭くて

誰も近づかないんです。それで夜陰に乗じて、ぼくは空っぽの水枕と梯子を持って行って、焼け残りの酒を盗み出してきましたよ。生涯一度のドロボーです（笑）。親父は臭いとも言わずに、喜んで飲んでくれました」

戦後の新円切替えとインフレで、父親の遺したお金はたちまち底を突き、学費にも困るようになって、五十嵐さんは学校をやめようと思い立つ。

「校長の永井幸次先生が、やめるのは惜しいからと、ぼくに夜間部の学生を教えるアルバイトをさせて、学費を免除してくださった。おかげでぼくは中川牧三先生に出会ってオペラを学ぶことができたし、四年生ときには『カヴァレリア・ルスティカーナ』のトゥリツドウを歌うことができたんですからね」

このオペラ上演は、学校が主催するものとしてはかなり本格的で、東京からオーケストラ（東京交響楽団）を招き、主役は先生方が

歌って、学生たちはコーラスというわけだった。

「トゥリツドウの役は東京（上野）音楽学校の研究科にいた竹内光夫さんという方でしたけど、当時の交通事情ではたまにしか練習に来られないんですよ。それでいつもぼくが代役で歌ってました。公演は大阪の毎日会館と京都の栄光会館とで八回あったんですが、途中でそのテノールが喉を傷めて歌えなくなっただんです。公演中止かというときに、指揮をしていた中川先生が、五十嵐が歌えるじゃないか、と言って、学生の身でありながら主役を三回も歌わせてくれたんです。昭和二十三年六月のことで、ぼくは十九歳でした。このことがあって、ぼくはオペラが大好きになったんです。だって第一幕の最初っからいいリアがあるじゃないですか。オーケストラで歌うって、こんな気持ちのいいものかって思ったわけです」

『カヴァレリア』はマスカーニの名作で、恋

の情熱の固まりのような南イタリアが舞台。主役の青年トゥリツドウは、人妻ローラに寄せる思いを、前奏曲のすぐあと、ハーブに乗せて切々と歌い上げる。「乳色のシャツのように色白のローラよ」と。

五十嵐さんはこのとき以後の公演でトゥリツドウを歌っていないそうなので、追っかけにとつては幻のオペラに終わったのが残念。

大阪音楽学校を卒業すると、母親と一緒に京都に移り、浄土宗の学校である東山中学と高校で音楽を教えることになる。

「そのうち家政学園にも掛け持ちしました。ここは女子校で、東山は男子校なので、両校の混声合唱団を作ったりしてました。ぼく自身もNHKの京都放送合唱団で歌って、落着いた生活だったんですが、その後ぼくの生涯の大恩人になる四家文子先生よっやふみこから、声を聴きたいという連絡があったんです。『カヴァレリア』のときにぼくの母親役を歌った松本



神戸、甲陽中学3年生の頃



昭和25年、京都、東山高校教師時代。生徒たちに囲まれて

さんという方が先生のお弟子だったの、そこからぼくのが知れたんでしよう。それで先生が京都へいらしたときに、どこかのレッスン室でお会いしたんだと思います。先生は当時お弟子が教師をしている学校を回ってオペラコンサートをなさってたんですが、相手役のテノールを探してたんですね。ぼくの声を聴くなり、あなたドン・ホセが歌えるわよ、って」

五十嵐さんは『カルメン』の譜面を手渡され、数回のレッスンを受けただけでデビュー。「日本語だし抜粋ではあるんですが、一応扮装もして演技らしきこともやりました。四家先生は体格がよかったですから、最後ホセに刺されて倒れるシーンなんか、ドスーンと地響きがしてましたね（笑）」

この学校回りの公演も何回かで終了したが、それきりの縁にはならなかった。

「四家先生から手紙が来て、東京へ来て勉強しなおしたらオペラ歌手になれるんじゃない

か、っておっしゃるんです。でもやっと学校の先生をして母との生活も安定したところだったの、すぐその気にはなれなかった。するとまた手紙が来て、お金のことなら心配いらないから是非上京していらっしゃい、ということなので、母に相談すると、私はまだ若旅館につとめて布団縫ったりする仕事を見つけてきましたね。そこでぼくは意を決して上京。洗足池（大田区）の四家先生宅に住み込んで、書生みたいなことをしながら芸大受験準備の勉強をさせてもらっていたんです」

上京は昭和二十六年十月。翌年三月には東京芸術大学声楽科に合格した。

五十嵐さんはここでもさまざまな幸運に恵まれたが、その最大のできごとは、のちに生涯の伴侶となる直代さんとの出会いだろう。

（つづく）

出雲

紀行

最終回

森清鑑



松平治郷（不昧公）

藩財政の復興

朝鮮人参栽培は、前の改革時に失敗している。研究が足りなかったのだと近藤は見抜く。そして、再挑戦を篤農家の二代目に託す。幕府が日光二荒山で成功している栽培法を盗めというわけである。小林茂重。日光に作男として潜入して苦節十年。この間、近藤は自分の禄の半分を削って茂重の家族の面倒を見たといわれる。出雲に帰ってさらに失敗を繰り返すがついに栽培に成功する。朝鮮人参はその後、長崎経由で外国船に販売され、出荷年に約一万両という途方もない利益を生み出す。やがて、茂重は譜代藩士に取り立てられる。近藤庄蔵は藩の要職を歴任し、朝日千助の補佐をする。大根島。中海なかうみにあるこの島で、現在も高麗人参が栽培されている。治郷の時代、人参栽培の秘密が悟られないように、大根島と命名されたという。朝鮮人参は、育つのに何年もかかり、その間、畑の滋養分をすべて吸い取るため、同じ畑では次の生育ができない。一度使った畑は長期の養成期間

が要る。それだけに高価なものだ。また、次々と栽培地を変えていくために、周到で計画的な土壌運用法が要求される。

続いて櫨はぜの木から取る蠟燭産業。先代からの産業ではあるが、治郷の時代、その生産量は飛躍的に拡大した。朝鮮人参と蠟燭は、松江藩の二大専売品として他藩の羨望の的になる。さらに、伝統的な鉄製品はもとより、紙の生産、出雲焼（陶器）、松江塗（漆器）、木綿、染め物、酒造などの地場産業が振興され、利益率の高い産業には藩を上げて支援し、御手船といわれる藩の海運船を運用し、藩外に搬送して利益を得た。

治郷は、人材を活かし、鋭い経済政策を行い、君臣一体の調和のとれた行政を行う。治郷の時代にも幕府命令の請負工事が発生するが、無事にこなししていく。こうして治郷は雲州松江藩の、いわば中興の祖となる。治郷は米沢藩の財政危機を救った、上杉鷹山と同世代の人物であるが、ひとつ傑出しているところは文化面での活動である。

文武両道。治郷の自己陶冶はこれに尽きる。徹底した武術修行は、殿様の鍛錬の域を遙かに超え

るもので、松江藩に居合いの不伝流を築く。藩の財政が豊かになるにつれ、文芸にも大いに理解を示した治郷は、藩校明教館を開設する。これは他藩の藩校開設にも大きな影響を与えた。

そして相撲。雷電為右衛門といえ、日本の相撲史において最強の力士であり、今日に至る相撲の系譜を造った人である。四十五歳で引退するまで二百五十四勝十負け十七預かり。優勝二十九回、勝率実に九十六・二％という前人未踏の驚異的な記録を達成。治郷は天明八年（一七八八年）、四人扶持で為右衛門を召し抱え、藩ゆかりの四股名「雷電」を与える。雷電は、十一代將軍徳川家斉の相撲上覧の際、「天下無双」の称号を授けられる。そして治郷は雷電の引退後も藩相撲頭として雲州抱え力士の頭取を勤めさせている。雷電の「張り手」、「鉄砲」、「門」^{かんぬき}はあまりに強烈であつたため、禁じ手とされたが、彼は温厚な性格で義に厚く、当時ではめずらしいほどの教養人であつた。「諸国相撲控え帳」という日記風の書を残しているが、非常に達筆で今日重要な相撲資料となっている。この

ようなところも治郷のお気に入りであつたに相違ない。雷電の墓は赤坂の元松江松平藩上屋敷に近い報土寺にある。こうして、雷電を始め多くの有名力士を抱え、松江藩なくして大相撲は成り立たないとも云われるようになった。

治郷の茶禅修行

治郷は武術修行と同じような態度で禅と茶道に取り組む。その徹底した修行は並大抵のものではない。そして茶禅一如の心境に到る。学問に対する態度も生半可のものではない。豊かな才能が磨き上げられて行く。いずれの対象に対してもまともなぶつかり本物を追求する、生来の激しい性格は、茶禅の修行によつて相手を思いやる、懐の大きな心境に達していく。この時代、茶道は大名の必須科目のようになっていたが、治郷の茶道修業は、とても殿様の手慰みなどというものではない。型通りの型式を学べば終わりなどという程度のことは、この人の物事に対する探求心がゆるさない。朝日丹波を始め、治郷を教育した人たちの茶道も

遠く及ばなくなる。治郷は二十歳にして「贅言^{むだごと}」を書く。茶禪の神髄は簡素を求める精神であつて、贅沢や遊び事などでは決してないという主旨である。彼は様々な茶道を学ぶが、石州流に辿り着く。さらに追求の本元は千利休である。茶碗とお茶さえあればよいとする「簡素」の原点。「足^たるを知る」。その行き着く先は美。すなわち「調和」である。領民の心を一本化する茶道。これがその後の彼の藩政治に見事に生かされる。この時代、すでに奢多な茶人の横行が目につくが、治郷の茶道は、それとは正反対で、藩祖家康の茶道である。利休から信長や秀吉に伝えられた茶道ではあるが、天下統一と共に華美な世界に転化していく。利休本来の、すべてを削ぎ落とした哲学でもある「簡素と和の精神」を厳に鍊る。この藩が多難な時にと、いう丹波などの批判もやがて傾倒に変わっていく。茶禪一如。大きな宇宙観である。後年、治郷は不味流を創始する。藩は無論のこと、江戸の諸大名に広めていく。そして、今日の松江の特産品、茶菓子などの食文化を残していく。

治郷は晩年、江戸大崎、江戸湾を一望する、現在の御殿山近くの抱え屋敷に名園を設け、利休本来の茶室を造り、超一流の茶器を集めた。現在で言うなれば一大文化センターの設立である。この時、蒐集した茶器類の詳細な名品目録は、今日に至るも彼の真贋を見抜く眼力を証明しており、大きな価値を残している。今日、茶碗、茶器の蒐集で膨大な浪費をしたと治郷を批判する人々も多いが、最近の研究によると四十四年間の購入費は、その間の藩総費用の約二%と判明した。それも購入費は自身に割り当てられた予算内でやり繰りしている。

治郷の茶禪政治思想

治郷は人を大切にした。特に信念を持つて事に当たる人材に対しては、自分の意見を乗り越えて厚く処遇している。治郷を支えた多彩な人々も実に自由闊達に活動し、真摯で率直な意見を具申している。多数の有能な家臣はもとより、藩儒・宇佐見恵助、学者・荻野喜内、禅修行の師・天真寺

の大巖^{だいがん}禪師など。他藩の殿様からみると、その様子は家臣を駒のように活き活きと動かしているように見えたことであろう。

その一方で父親の時代に改革に失敗した、小田切尚足の処遇に対しても、他藩や幕府によく見られるように追放などせずに、逆に加増して苦勞を称え、隠居させる際には、その息子にきちんと家を継がせた。また、朝日丹波の大改革の際に、罪人となった者の大半を出獄させる大赦令も発布している。茶禪の心は、君臣一体の和の政治に見事に体现されている。丹波の息子、千助は田沼意次の息子、意知に「松江藩政治の要諦は、上が下との約束事を破らないことにあり」と語ったそうである。

足立美術館

松江から米子に向かう安来市に足立美術館はある。ルイス・ティファニー美術館が日本の美に影響されたアール・ヌーボーの一大美術館とすれば、

ここは明治に代表される日本美術、陶芸の粹を集めた美術館である。創設者の足立全康氏（明治三十二年〜平成二年）の経歴がまた面白い。氏は地元出身の実業家であるが、若いときからあらゆる商売に挑んだという。失敗を繰り返したが、いかなる場合にも金のこととで人様に迷惑をかけたことがないという。この信用が彼の経世を導いた。大阪に大規模な土地を買いとバブルの高騰で漁夫の利を得る。彼の偉いところはその資産を全て精算し、美術館と庭園建設に注ぎこむ晩年の人生である。横山大観を初めとする近代日本画壇の巨匠たちの作品約千三百点を収集し、理想とする庭園の建設に乗り出す。こうして誕生したのが足立美術館である。彼はユーモアに溢れた自由を謳歌する人物であつたらしい。自ら刻んだ戒名がおもしろい。「美術院高色庭園居士」。一度聞けば忘れぬ戒名ではある。

さて、その美術館の様相であるが、まず作品群から紹介したい。

数ある日本画の中でも一大特色は約百三十点に

のぼる横山大観のコレクションである。著名な「無我」、そして雄大な秋の自然観を楓の赤と黄色、背景の水の青にそぎ落として表現した「紅葉」。今回は特に水墨画に目を見張った。昭和十五年に発表された「雨霽る」は霊峰富士を左上に雲の流れ、山々のダイナミズムをここまで落とし抜いて表現できるものかと驚嘆した。黙ってみていると恐ろしい迫力である。大観だけではない。奥田元栄の「紅葉」、伊藤深水の「ペルシャ猫」（これは木暮実千代が猫を抱く姿だ）、川端龍子の「水煙」（黒と白のコントラストの極限）、竹内栖鳳せいほうの水墨画「瀑布」（巨岩の墨絵の迫力）、河合玉堂の「夕月夜」、「うかい」（夜火の見事なこと）、西村五雲の「寒梅」（木菟のリアルな描写）、榊原紫峰の「梅花群禽（ばいかぐんきん）」（単色の濃淡で描かれたメジロの姿）、「柿竹（かきたけ）」（枝に一つだけ残された柿）、上村松園の「楠公夫人」など。とにかく近代画壇の最高傑作が堪能できる。陶芸館では河井寛次郎の黄葉泥刷毛目茶碗が気に入った。河井寛次郎、北大路魯山人の作品はそれぞれ約二百点收藏されている

るというから驚く。

さて、問題の庭園だ。足立さんが入れ込んで造った日本庭園の美はそのスケールといい雅の世界といい存分に見る者を安らぎの世界へと誘ってくれる。一万三千坪に及ぶ美術館と庭園は、遙か遠くに山景を抱き、四季折々の自然美を現出させてくれる。滝、岩、木々、芝、水の造形は、この美術館に行つてこれだけ見ても十分に満足できる。美術作品に疲れた目を癒す効果もある。美術館の中から巨大なガラス越しに楽しむのもよし、外に出て直接目にするのもよし。とにかく日本庭園の美を満喫できる。

ルイス・ティファニー美術館と足立美術館は正直、何度か訪問するに値する。西洋庭園とアール・ヌーボーの美、日本庭園と日本画壇の美。島根県は、松江と安来市に対極する創造美を造った。



◆足立美術館の広大な庭園

安来節

安来市といえ、民謡「安来節」が著名である。安来節の起源は江戸中期といわれる。発祥は境港近辺であつたらしい。すでに貿易港であつたこの地には船の出入りが頻繁で東北などの民謡と入り交じつて次第に独特の節回しが完成していったという。しかし、現在の安来節は明治に入つておさん節を軸に工夫され、末期には出雲地方で大流行し、大正時代に、渡部お糸が、三味線の名人富田徳之助と共に一座を組み、全国巡業。これが大好評となり、全国に波及、ついには上野鈴本で当たりをとることになった。

さて、安来節につきものの「どじょうすくい」であるが、この所作の起源は出雲特産の砂鉄をふるいにかける姿だという。すなわち、土壌すくいであつたわけだ。その姿を江戸末期に酒飲みたちが泥鰌を掬う仕草に即興的に移し替えたのが始まりという。とにかく安来節の破天荒なおもしろさは出雲の姿を象徴していると思う。これはいかにも歌舞伎を生み出した「出雲の阿国」以来の血であらう。

◆参考文献 真説「松平不味」長尾遼原書房

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

古島法衣店

有限会社

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-245231

名号をきくというとも信ぜずば、きかざるが如し。たとい信ずというとも、となえずば信ぜざるが如し。ただつねに念仏すべきなり。

法然上人「つねに仰せられける御詞」

阿弥陀さまのお名号を聞くとしても、念仏往生を信じなければ聞かないのと同じことです。たとえ信じるといっても、お念仏を称えなければ信じていないも同然です。ただいつもお念仏を称えなさい。

難信の法と日焼け止め

湯船に腕を浸すと日焼けした肌がいまだに痛い。それにしても、あれから何日経っているのだろうか。

「あれ」とは晴天に恵まれた地元長野の少年野球大会のこと。善光寺平を流れる犀川の河川敷グラウンドには県下から三十チーム以上が集まった。

息子が所属するチームは早々に敗退したが、親たちは審判だのグラウンド整備だのにかり出され、私は早朝八時前から午後三時過ぎまで運営担当のグラウンドに張り付いた。

じつは少年野球のお手伝いは今回がはじめて。チーム運営に熱心な親御さんも多いが、その日は日ごろの不義理を埋め合わせようと張り切った。

ただはじめての分、微妙な勝手が分からない。当日の服装もしかり。当日の予想最高気温は二十五度。長袖か半袖か、前の晩、ずいぶんと迷ってしまった。「うーん、涼しい方がいいだろう。日焼けしたって大したことはないか」と高をくくり、結局、私は野球帽に半袖のポロシャツを選択した。

高をくくったのには伏線がある。大会数日前、チームから大会運営に関するプリントが配られ、その中に持ち物の指示があった。

一、持ち物 …… 日焼け止め、……

「河川敷Ⅱ直射日光と照り返し」という公式が浮かびはしたものの、「なに、

まだ六月の頭、多少の日焼けなら乙なもの。日焼け止めなど、お肌を気にするご婦人向けの持ち物だろう」と決めつけた。

それがいけなかった。

当日、午前中は爽快そのもの。半袖で正解だった。昼前、多少日焼けはしたものの、むしろちょうどいい焼け方と粋がった。ところが昼下がり、もう少しで大会終了という時点になって、腕がやたらとヒリヒリし出してきたのである。見れば赤紫。慌てて水で冷やしたが時すでに遅かった。

たしかに「持ち物、日焼け止め」という案内を目にはした。しかしそれを私は他人事だと思い込んだ。だから、信じなかった。いや、信じるとか信じないという以前に「たいした日焼けもするまいに、日焼け止めを用意するなんざ面倒くさい」とあえて無視したのである。

今回、この「面倒くさい」にしてやれたわけであるが、この感情、仏教的に見ると意外に厄介だ。たとえば仏教はこの世を一切皆苦と見定める。とはいえ「ああ、今日も苦しみに出会うのか」だなんて、わざわざ意識して暮らす人がいるだろうか。それこそ面倒くさいことである。凡夫の日常は一切皆苦をあえて無視することで、うまく取り繕われているのではなからうか。

「面倒くさい」は決して無視できない感情なのである。

その点、釈尊はどう考えていたのだろうか。じつは釈尊は浄土の教えを「難信の法」（『阿弥陀経』）と説き示す。この世を一切皆苦と厭えばこそ浄土往生を願うのであるが、この世を一切皆苦と見定めてしまうと、日常の平穏が取り繕えなくなる。凡夫にはそれが堪えられない。面倒くさいと一切皆苦を回避する。だからこそ「難信」なのである。しかし、それでは浄土の教えから遠ざかってしまい、元も子もない。

冒頭の法然上人のお言葉、後半部分を裏返ししてほしい。お念仏を唱えていれば浄土の教えを信じているのも同然という道理にならないだろうか。一切皆苦に対する凡夫の「面倒くささ」はすでに問題ではない。

釈尊が一心不乱に「執持名号（念仏を称えよ）」（『阿弥陀経』）と説くのも、まさにそのことだと思ふのだ。

初夏の紫外線は真夏よりも強いと後から妻に聞かされた。信じられなくとも、面倒くさくとも、あの日は日焼け止めを持って行くのが正解だった。

ただ唱えれば、それでいいように。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

本誌5月号、32頁「来迎」のルビ「らいこう」は「らいこう」の、34頁「境界愛」のルビ「きょうかいあい」は「きょうがいあい」の誤りでした。ここに訂正し、関係者にお詫び致します。

パトリス・ルコントの
DOGORA

監督
パトリス・ルコント

パトリス・ルコント監督といえば、あの『髪結いの亭主』くらい、『仕立屋の恋』『フエリックスとローラ』そして、この六月から本邦公開中の第二十一作目『親密すぎる関係』に至るまで、個性的な俳優たちから、眼差し、台詞まわし、そして肉体の柔軟性に及ぶ、軽



8月26日より、東京都写真美術館ホール他にて全国順次ロードショー

妙なる演技力を惹出す「名匠」であるが、作品の一事について忘れがたい「映画音楽」の活用術にも端倪すべからざるセンスを披瀝していた事に今更のように気付かせるのが、この第二十二作である。

『ドゴラ』とは、フランス現代の作曲家、エティエンヌ・ペルシヨンによる交響曲（合唱つき）の題名であるが、例えば『仕立屋……』における「ブラームスのピアノ四重奏曲」や『フェリックス……』における「愛しすぎて」が、BGMとはいわぬ迄も、せいぜい脇役程度の重みしかなかったのに対して、映画『ドゴラ』における音楽『ドゴラ』は、「映像」とともに「主役」に躍り出る。

そればかりではない。「合唱」の歌詞はすべて、エティエンヌが創造した「ドゴラ語」で歌われるので、観客たちは言葉の「意味」を棄て、「ひびき」と「声の魅力」に直参すべく仕組まれている。だからこそ、オープニング・クレジットに続いて、ルコント自筆の

次のような「前書き」が映し出され、これにつけられた日本語訳を最後に、「日本語字幕」は出場を失う。

いわく「ずっと以前から、役者がいない、シナリオもない、言葉さえもない、ただ純粹に感情に訴え、心を揺さぶる、音楽の映画を作りたいと思っていました。それが『DOG ORA』です」と。

ここでタイトルに話を戻すと中央のGの上にアンコール・ワット中央塔風のカットが、そしてGを挟む二つのOの上に左右の小塔風のが付けられており、更に副題として「眼を開こう」という意味のフランス語が添えられている。つまり「言葉」というフィルターの介入で避けるべく、「聴覚」と「視覚」とを全開体制に保つべく、観客たちに誘^{いざな}われるのである。

映画はモノクロのオーケストラのシーンに始まり、そして終るのだが、奇妙なことに時々映し出される指揮者以外の、演奏者たち

も楽器たちもすべて、一貫してピンボケ状態におかれ、合唱隊の顔もリズムミカルな伸縮運動を反復する一群のアメーバの如くとりとめもない。「眼を開こう」との呼びかけに応えなくても、何も定かに見えぬフラストレイションが限界に達せんとする時、スクリーン溢れんばかりの色彩と生命力を帯びて鮮やかに映し出されるのが、カンボジアの万象である。

試写会資料からルコンテ監督のメッセージを引用するならば、「二〇〇二年十二月、私は初めてカンボジアを訪れました。……到着早々私はこの国に圧倒されました。これほど激しい感情に襲われたことはかつてありません。ヨーロッパ人として、この国の人の不安定な生活を哀れむような気持ではありません。彼らの表情、姿、視線がまるで『人生の賛歌』のように映ったのです……カンボジアでは目、開き、辺りを見回すことは、とても大事な意味を持ちます（傍点評者）。周りの風景がすべて人生へのメッセージになるからです。私

はこの景色を自分の中に刻みこもうと、何キロも何時間も歩き続けました。そしてふと突然『ドゴラ』（音楽の・評者注）の事を思い出したのです。この国と『ドゴラ』のメロディが、感電するように私の中で結びついたのは必然でした……」という次第で、更に「こうした風景を前に、それらを表現する言葉なんて存在しません」「これらの風景の前ではすべての言葉が無力です」との製作意図に鑑み、かの『大乘起信論』に説かれる「離言真如」の境地に参入し、アンリ・ベルクソンの所謂「意識の直接与件」をキャッチすべく、劇場における「直接体験」をお奨めするよすがとして、印象的なシーンのいくつかを列举する事としよう。

撮影は音楽『ドゴラ』をウォークマンで聴きながら、首都プノンペンとその近郊、及びアンコールに近いトンレサップ湖北岸のシュムリアップ周辺で行われ、左の一〇九は前者、一〇一五が後者である。

- 一、プノンペンの通りを疾駆するモーターバイクに跨る、二人乗、三人乗……六人乗りの家族たち。
- 二、ガソリンスタンドで洗車する老若男女。
- 三、世界最大といわれるゴミ捨て場で、何かを漁る老若男女。
- 四、二〇〇〇人の女性達が一糸乱れずミシンを操作する大縫製工場。
- 五、ゴム樹が林立する広大なプランテーションで黙々と進行する樹液採取。
- 六、寺院の前で老女が売っている、線香と蓮の花。特に後者に施される心遣い。
- 七、ピンボケ状態に終始するが、黄衣の色彩から推定される僧侶たちの存在。
- 八、メコン川の漁夫たち。
- 九、NGO「子供たちの笑顔のために」の施設で、安眠する子供たちの寝顔と、同じNGOによる、前記ゴミ捨て場における子供たちへの給食活動。
- 一〇、トンレサップ湖畔の夕景。

- 一一、荷台に鮎づめの乗客(?)を満載し、オークル色の大砂塵を巻上げつつ、凸凹道を驀進する、古く頑丈そうな中型トラック三、四台。
 - 一二、同じくオークル色の埃の彼方から、三々五々、家路に赴くらしい母子たちのシルエット。
 - 一三、緑の田舎道を、大人用の自転車を器用に操作しつつ、疾走する少女たち。
 - 一四、トンレサップ湖面(?)に点在する住居。
 - 一五、古典舞踏・舞姫たちの優雅な指づかい。
- 番外 ほとんど各シーンに共通する、老・若・男・女・幼児・嬰兒たちの眼差し！眼差し！眼差し！
- × × ×
- 例によって、とはいいつつも、言葉による「蛇足」そのものを慎むべきかも知れないが、宿業の赴くところ敢えて二、三を記すならば、前項「一四」のシーンで学校帰りの家路を辿

る少女が、湖面をジャブジャブ進んで行くフシギなショットがある。物の本によるとこの大湖は季節によって湖面の面積が二六〇〇から二五〇〇平方キロに変化するとの事で、乾季は地上に露出している「道」が、それ以降も可能な限り「活用」されているらしい。ここで「地球温暖化」に思いを馳せたりしてはいけないのかも知れないが、スクリーンに漲る幼児軍団のエネルギーから、六月一日日本厚生労働省発表の一・二五という数値を思い浮べるのは、たぶん「正解」なのだろう。

思えばルコント監督の世界の基本的構成要素として、「交されあう視線」があった。例えば『仕立屋…』において、徒らに一方通行だった仕立屋の視線が稲妻の夜、娘の視線に受けとめられる事によってドラマが始まり、演技としての眼差しがプロットを展開させた『ドゴラ』のスクリーンから発信させる視線は「演技」とは無縁の、『大乘起信論』にいう「分別」を離れた視線である。老・若・

男・女・幼児・嬰兒たちが、観客に注ぎ続ける「無分別」の眼差し！眼差し！眼差し！を敢えて受け止めようとする努力は、遥かに大いなるものの「慈眼」にまみえる時の「歓喜」と「戦慄」の予行練習になるかもしれない。

(長野・十念寺住職)



「極楽」という言葉は中学生でも知っている。

「聞いて極楽、見て地獄」などとも言われ、日常語としてもよく使われている。

湯船にゆったりとつかって年寄りには、「ああ、ごくらく極楽」と呟く。

孫達も真似て「ごくらくごくらく」と。その極楽という言葉は何処から出ているのだろうか。誰が作った言葉だろうか。暇ができると、つい考えてしまう。

『古事記』・『日本書記』にはないから日本人が作った言葉ではない。

經典から出た言葉であることは言うまでもない。元を尋ねれば、梵語の *Sukhavatī* の漢訳であるが、それを「極楽」と訳すとは絶妙、頭が下がる。

浄土三部經に当たってみると、『阿彌陀經』と『觀無量壽經』には「極楽」の

言葉が度々出てくるが、『無量壽經』には一度も出ては来ない。

『無量壽經』を訳した康僧鎧は、但有自然快樂之音 是故其国名曰安樂

と言い、またその国を仏国土、無量壽国、安養国、嚴淨国などと、訳に苦心の戸惑いが感じられるが「極楽」はない。このあと約百五十年後に鳩摩羅什が訳した『阿彌陀經』に初めて出てくるのである。

『觀無量壽經』は『阿彌陀經』の後、五十年程たって曇良耶舎によって訳されたとされているから、「極楽」という羅什訳がこの經典に取り入れられたものであろう。

羅什の訳經は秀麗であると言われているが、「極楽」と訳した羅什三蔵にあらためて心から敬意を表したい。

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

いかにして

われごくらくにむまれまし

みだのちかひのなきよなりせば

浄土門主

総本山知恩院門跡第八十六世

中村 康隆

大本山増上寺

法主

成田 有恒

大本山百萬遍

知恩寺

法主

服部 法丸

〒606・825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院

法主

大田 秀三

大本山善導寺

法主

阿川 文正

大本山光明寺

法主

宮林 昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

浄土宗宗務総長

水谷 幸正

大本山増上寺執事長

江口 定信

〒105-0011 港区芝公園四・七・三五

法然上人御誕生地

美作
誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七 (二二) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二二) 五〇五一

函館

称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八・十四
電話 〇一三八 (二三) 〇五七四

阿弥陀仏と

十こゑとなへてまどろまん

ながきねぶりになりもこそすれ

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

これを見ん
おりくごとにおもひで、
南無阿弥陀仏とつねになへよ

長野教区
十念寺住職

袖山 榮真

〒380-0845 長野市西後町一五六八

清水 湊

忠高山
實相寺

〒420-0839 静岡市葵区鷹匠
二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四(二五二) 三六七三
FAX〇五四(二五二) 三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川 匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 麻生 諦善

淑徳学園中学校・高等学校

校長

川添 崇

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

塩釜市
雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷 英敏

本應寺

熊谷 靖彦

〒844・1411 嬉野市塩田津中町

世継地蔵 上徳寺

塩竈 義弘
塩竈 義明

〒600・8119 京都市下京区富小路通五条下ル
本塩竈町五五六番地

弘経寺住職

(財)浄土宗報恩明照会理事長

金田 進徳

〒302・0023 茨城県取手市白山二・九・二八

われはたゞ

ほけとにいつかあふひくさ

このころのつまにかけぬ日そなき

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

かりそめの
色のゆかりのこひにたに
あふには身をもをしみやはする

孤峰山 蓮馨寺 吞龍上人奉祀
宝池院
川越市仏教会長・教誨師
乗原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話 〇四九 (二二二) 〇〇四三
FAX 〇四九 (二二六) 〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0062 東京都港区赤坂四・三・五
電話 〇三 (三五八三) 三六三〇

明福寺
福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

愚鈍院 こつぶがや文庫主
中村真道
中村瑞貴

〒984-0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話 〇二二 (二五六) 六〇五七

安楽寺

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五

住職 飯田實雄

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八（五四二）〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六（六七七二）〇四四四

極楽へ

つとめてはやくいてたゝは

身のおはりにはまいりつきなん

白本尊阿弥陀如来

静岡 宝台院

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話 〇二六六（五二）一九七〇
FAX 〇二六六（五二）三四四六

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

あみた仏と
心はにしにうつせみの
もぬけはてたるこゑそすゝしき

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

五重塔建立二十周年

定義如来
西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三九三三)二〇一一
HomePage: <http://www.johgior.jp/>
E-mail: saihouji@johgior.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨真寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・一二

暑中お見舞い申し上げます 平成十八年

往生は

よにやすけれとみなひとの

まことの心なくてこそせね

横浜

大光院

www.daikoin.com

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

光取寺

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話〇三(三四四一)八三八四

養運寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

大吉寺

住職 成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

浄土誌上句会

●子

〔特選〕薔薇園の母子像白く夕暮れる

長谷川達人

園のどの辺だろう。子供を抱いて立っているのか、あるいはかがんでいるのかなどは、読者に任されている。人が去り暮れが迫ってくると、母子は白く浮き上がってくる。いろいろのばらの花に囲まれて。

〔佳作〕夏柳老いてはすべて子にたより

金谷 友江

伸ばす手に右往左往の子蟹かな

伊藤寿美子

茄子植えてその夜の雨にやすらぎぬ

蘭田 郁子

●壁

〔特選〕左官屋の塗る壁厚く梅雨に入る

原口由香里

外回りではなく、この日は部屋の壁塗りである。下地から始まって、今は仕上げに入っているのだろう。丁寧にててを使ってゆく。こ

の頃出来合いのものを張れば済みというのが
多くなった。「厚く」がうれしい。

〔佳作〕ブロック壁越えて隣家の白木蓮

佐藤 雅子

鉄壁のそなえ心に更衣

片桐てい女

民宿の壁に掛けたる五月富士

山口 信子

●自由題

〔特選〕独り身の点灯どつと花疲れ

直田 豊人

花見から帰るともう暗い。電灯をともすと
一度に疲れが出て座り込む。ここに独り身と
いうのは、これまではそうでなかったという
ことだろう。そう思うことで、「どつと」が
より生きてくるというものである。

〔佳作〕弥陀の手に五色の糸や青時雨

河合富美枝

新緑に立つも座るもよいしよかな

東 保

初夏や朽舟白く裏返り

中村 和徳



子

開帳の秘仏間近に燕の子

河合富美枝

夏落葉泣かきるるとも子が欲しと片桐てい女

薫風や虚空を握り子の眠る

中島富士子

長椅子に気怠く掛けし夕薄暑

浜口佳春

風はらみ小子の町に鯉のぼり

西井 正

壁

白壁に影落しゆく春の雁

河合富美枝

岩壁が大浪砕く夏の果

金谷友江

白壁は何も語らず走り梅雨

中島富士子

白壁や日傘の影が後追いぬ

浜口佳春

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇六年七月二十日

発表・『浄土』二〇〇六年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

盆 西瓜 自由題

古き屋の壁塗り替えし五月晴

増田信子

自由題

柿若葉夫在りし日の朝茶かな

金谷友江

炎暑来て触れてはならぬことばかり片桐てい女

雪残る谷間を灯し湯治宿

佐藤雅子

一本の麦の穂に風立ちにけり

中島富士子

窓を切る燕影に覚む島の宿

石原 新

鯉のぼり鱗きらめく海の風

北川弘子

目刺選る海の香りを手に移し

蘭田郁子

絶え間なく雨の雫や藤の花

小林恵美

春雷に軍鶏が一声放ちけり

浜口佳春

揺られゆく船の語らい青嵐

井村善也

花に雨貼り絵のようにボート浮く

増田信子

ポケットの古きちり紙衣更え

山口信子

田植時泥にたじろぐ一年生

伊藤寿美子

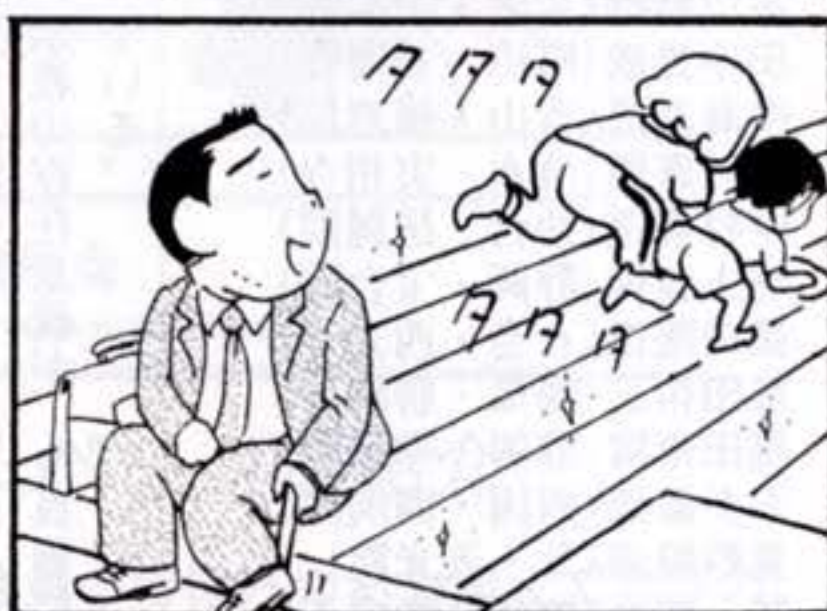
軒並みに店閉ざす街初つばめ

寺下忠至

さっちゃんはネッ

32 かい目

かまち♡ひろう



編集後記

団扇持てあおぎし母も今はなし 岱潤

先日第一生命経済研究所の小谷みどり

さんの講演を聴いた。『葬儀白書』などの著書もある彼女は、最近悲しくない死、涙のない葬儀が増えているという。つまり、結婚式などでも親族を呼ばなくなつた今、親族が集まることなど全くなく、親の通夜、葬儀が久しぶりに会う場となつてしまい、いわば同窓会状態の話題で持ちきりになることや、永い老々介護のはてによりやく逝ってくれた親に対して、悲しみよりも安堵の気持の方が強くなつてしまう場合、はたまた何十年も会っていない親の死は、三人称の死、他人の死と同様になつてしまい、ご遺体に触

れることさえ出来ない六十過ぎの人がいるという、こうしたことなどが理由である。

そして、「菩提寺と墓は、子孫への負の財産」と思う人々が増え、菩提寺があるから葬儀が自由に出来ない、墓があるから縛られるといった、今まで予想すら出来ない考えが声に出して語られ始めているという。こうした人々の思いはただひとつ、「家族に迷惑をかけたくない」である。

人間関係の軽薄さは、人間の絆を迷惑という言葉に置き換えてしまっているように、何かとても淋しい気持になった。宗教の存在意義が、今真剣に問い直されている。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
舩博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻七・八月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十七年 六月二十日
発行 平成十八年 七月一日

発行人

編集人

真野龍海
佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三三七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3 月合併号で通巻 800 号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は 1700 名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800 冊以上、総 35000 ページあまりの貴重な財産を PDF 化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在 360 冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊「浄土」検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果かから読みたい浄土を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすれば PDF ファイルが表示されます。お読みいただくには PDF ビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF 一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

本

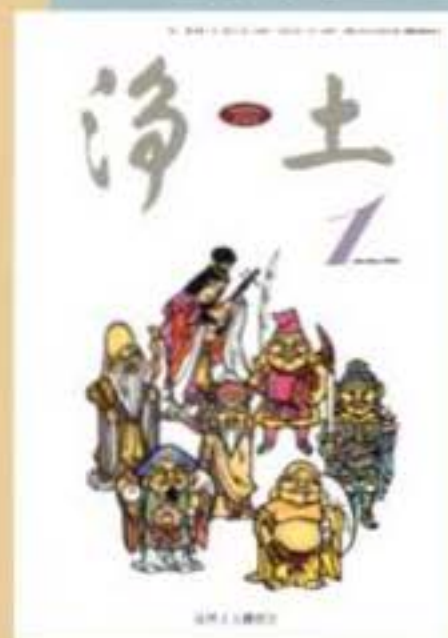


「念佛讀本」完全復刻版
1,600円



「差出人は法然さん」
600円

月刊「浄土」
バックナンバー



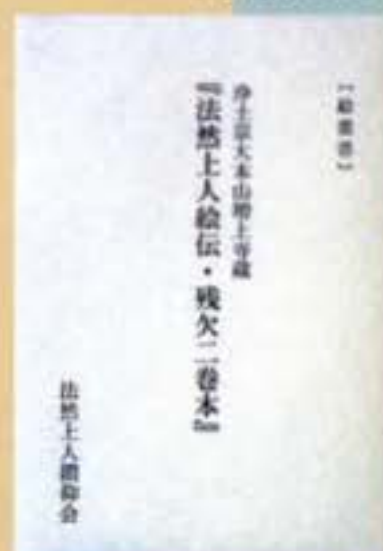
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版「浄土への道
法然上人法語抄」
1,000円



「ブッダ
知れば知るほど」
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊「浄土」を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036